

タイトル	交錯することば：地中海文明と文字の伝播(<特集>共同研究報告：欧米諸国における多文化の問題と日本の課題(続))
著者	桑原，俊一
引用	北海学園大学人文論集，19：29-63
発行日	2001-07-31

交錯することば

— 地中海文明と文字の伝播 —

桑原俊一

Key words : 文字, アルファベット, 宗教

はじめに

言語の起源についていえば、今のところ実証できうる段階にはない。もちろん長い記憶による口承の時代や無文字文化の地域は現在も存在するが、言語について実証できうるのは人類が文字を考案してからということになる。文字はすぐれて文化的営為の結果である。備忘手段としての文字から次第にシステムとしての文字に発展する。物事に対応する文字から語に対応する文字となる。ここから文字は単なる備忘の手段ではなく、情報を伝え、学習することのできる対象となる。書かれたサインとしての文字はことばとして理解する必要が生じた¹。

文字の問題は当事者がどのような文字体系の使用者であるかによって異なってくる。日本の文字体系は世界のなかで最も複雑であるといわれているが、他の諸言語の文字体系を手掛りに比較すると、さらに日本の文字に関する特徴も明らかにされよう。欧米諸語の場合は原則としてローマ・ラテン文字の子音からなる単音文字である。書き順は書材の左上隅から右へと書き進み、改行してさらに左から右へ綴字される。日本語は漢字仮名混じり文²であり、仮名(日本語アルファベット)は音節文字である。仮名は漢字の一部分や草書体から考案されたが、同様な方法で音節文字を創る仕方は他の言語にも存在する。日本語は縦書きの場合、右隅から下方へ、さらに文が継続されるときは、改行され左か右へと書かれる。この繰り返しが縦書きである。横書きは左から右へ、ローマ字の書き順になっている。

もっとも看板などでは左から右に書かれることもある。こうした文字の考案や文字の書き順の固定化には交錯した歴史的・社会文化的背景が認められる。つまり文字文化は本来多文化主義や異文化の問題を内包しているといえる。本稿ではヨーロッパ文字体系の基幹となったローマ・ラテン文字の歴史を辿ることで、文字の考案の背後に介在するとりわけ社会文化的・宗教的關係を探ってみたい。

1. 問題の所在

現在採取されている言語の数は3000種以上といわれているが、文字組織を持つ言語となると極端に少なく、現在使用されている言語の文字は約100種である³。文字の発明は経済・行政上の記録の必要から生じたとされている。しかし文字と宗教の關係は黎明期の文明において既に深いかかわりをもっていたことも事実である。最も早く文字の使用が確認される地域は地中海の東に位置するティグリス河とユーフラテス河の中・下流域、所謂メソポタミアであろう。この地域の南に栄えたシュメール初期王朝時代⁴の場合、神殿經濟を中心とする都市国家であった。したがって神殿へ奉納される品々の克明な記録が文字の必要を促した。他方、この事実は文字と神殿との密接な關係をも明示するものであり、文字と宗教の不可分な關係を認めることができる。文字の発明後、つまり楔形文字やエジプト聖刻文字からアルファベットが誕生するが、このセム語系アルファベットは宗教的・経済社会的要因によって種々の変容をとげる。ここでは世界の文字を網羅的に対象としたり、厳密な文字学を展開したりするものでもない。本稿ではセム語系アルファベット文字の子孫としての印欧諸語をはじめとして、西アジア⁵諸言語の文字の変種を何処までたどることができるかを論考する。そのさい言語学的、あるいは文字学的分析は最小限にとどめ、宗教文化論的視点を基軸として考察する。

ここで取り扱う文字の範囲は今日一般にヨーロッパ諸国で使用されているローマ字の変種と同一起源の文字から袂を分かった西アジア諸国から東

アジア諸国において使用されている文字の変種ということになる。したがって本稿ではこの範囲における文字文化の歴史的経緯と宗教的要因を論考の対象とする。宗教についても具体的には、ユダヤ教、キリスト教とイスラーム教(セム系の宗教)、さらに仏教がどうアルファベット文字文化とかわりをもってきたかという点に限定する。なぜならこれらの諸宗教にわれわれの取り扱う文字文化の多文化主義的検討課題が集約されているからである⁶。

2. ユダヤ教

西アジアでは古代メソポタミアの宗教を除外すれば、主要な宗教はセム系宗教である。つまりユダヤ教、キリスト教そしてイスラーム教の3宗教になる。これらの宗教はユダヤ教を母体として、そこから派生して、キリスト教とイスラーム教が成立した歴史的経緯は周知のとおりである。本稿ではこれらの宗教における文字文化について考察することをとおして、ユダヤ教文化、キリスト教文化とイスラーム教文化の一断面を明らかにしたい。

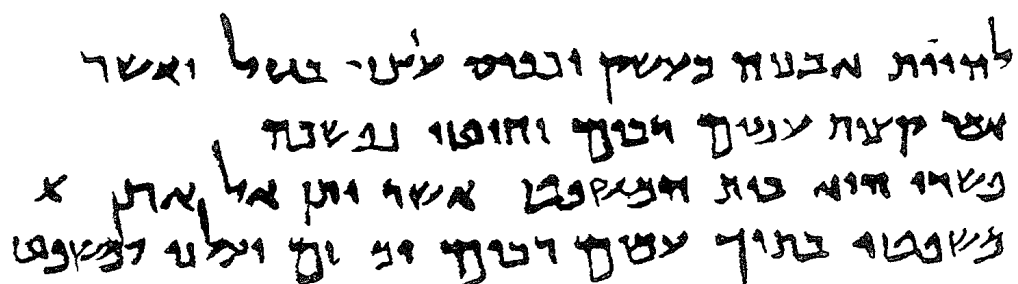
ユダヤ教はキリスト教やイスラーム教と著しく異なる側面をもつ。それはユダヤ教が民族宗教であるという点にある。したがってユダヤ教においては積極的に教えを宣教するという意図はない。その意味でユダヤ人の宗教ということになる。しかしユダヤ人とは誰か、ということになると問題はそう簡単ではない。歴史的に西アジアでは民族の移動と混交が数千年にわたって幾度となく繰り返されてきた。したがって常に諸民族の混血という事態は結果として避けがたいことであった。生物学的に純粋な人種としてのユダヤ人などではありえなかったのである。とりわけ西欧文化の営みの中で捏造されてきたユダヤ人の定義は西アジアの歴史を無視した偏見に由来するといつてよい⁷。今日では一般に文化人類学的定義が適応されている。つまりユダヤ教を信仰対象とし、その共同体に所属する人々をユダヤ人とすることが最も妥当であろう⁸。アフリカ系ユダヤ人やアジア系ユダヤ

人も存在するが、積極的に伝道し、ユダヤ教徒に改宗させることはない。一見文字文化と無関係に思えるが、後にキリスト教やイスラーム教を取り上げるさい、際だった特徴となる「伝道のための文字」という概念は、そもそもユダヤ教には存在しないのである。

それにもかかわらずユダヤ教と文字の関係は極めて深い。その事実はユダヤ教における「文字と文書の神聖視」という概念に明確である。神の名称の神聖視にはじまり、さらに文書の神聖視へと発展する。神聖なる書物、「聖典」という観念が形成される。ことばの神聖視はユダヤ教以降のキリスト教やイスラーム教に継承されていくことになる。ただし文字の神聖視はセム系起源の宗教に固有なものではなく、他の諸宗教にも少なからず見られる現象である。重要なことは文字や文書の神聖視が各宗教の本質と密接にかかわっていることであろう。

ユダヤ教の文字はセム語族⁹における北西セム語の一方言であるヘブライ¹⁰文字で書写されてきた文字を指す。それ自体はフェニキア・アルファベットの変種¹¹である表音文字である。なんといってもユダヤ教の中心に位置づけられるのは『旧約聖書』¹²である。しかし今日ユダヤ教徒が使用している聖典テキストがどのような経過をたどって現在にいたったか、というとその実態は不透明なままである。いわゆるマソラ・テキスト¹³の編纂は6世紀以降であって、それ以前のテキストとなると必ずしも明確ではない。紀元前4世紀頃に始まった『旧約聖書』の編纂過程を推測する上で最も重要な資料は前2世紀―後1世紀にまで遡ることのできる「クムラン写本」¹⁴(図1)である。これらの文書は『イザヤ書』や『ハバクク書注解』などの

図1 “死海文書”のうち『旧約聖書』『ハバクク書』の部分



テキスト群を含むことでいっそう重要視されることとなった。テキストの文献学的問題はわれわれの論考の対象ではないので、そのことに触れないが、マソラ・テキストと「クムラン写本」における『旧約聖書』テキストが極めて近似しているという書写上の継続性は注目される。つまりユダヤ教団の成立以来、文字の神聖視によってテキストの伝承は綿密かつ厳密に行なわれてきたことがうかがわれる。

ユダヤ教の場合、文字の神聖視が最もよく現われるのは「神名」においてである。もっとも神名の神聖視はユダヤ教だけに固有な現象ではなく、同系語族（セム語族）の神々は勿論のこと、他の宗教にも一般的に認められよう。それにもかかわらずユダヤ教にとって神名の呼称には独特の性格が付与された。一方でパレスチナ地域に一般的であったエル¹⁵に語源を持つ神の名として現われながら、他方でユダヤ教に固有な神名 יהוה YHWH（ヘブル語のローマ字翻字）として現われる。後者の神名の音読は不明瞭なままである。通常「ヤハウエ」とか「ヤーウエ」などと音読される。われわれにとって興味深いことは、神名 YHWH の固有性はまさしく神名の神聖視に起因することである。つまり朗誦にあたり神名 YHWH は神聖なる文字であるがゆえに音読することが避けられてきた。長期間にわたるこの行為は神名の正確な読みを失わせる結果となった。このことはセム語が子音文字によってのみ表記する言語である特殊性にもよっている。セム語においては、表記された子音の形態素によって意味が確定できるからである。しかしながら神名 YHWH について、いまだ正確な音読はなされていない。今日ユダヤ人はこれをアラム語で「主」を意味する「アドナイ」と音読する。この神名の固有性は「クムラン写本」の書字体からも明らかである。写本全体はアラム・ヘブライ文字で書かれていて、前3世紀頃にはかなり定着していたと思われる。それにもかかわらず神名 YHWH だけは依然としてフェニキア・ヘブライ文字が維持されており、神名の神聖視化は前3世紀以前から行われていたものと想定できる¹⁶。

こうした神名にたいする神聖視は単に『旧約聖書』の巻物のみならず、あらゆるユダヤ人共同体の宗教書文書にも適応された。これらの文書はの

ちに埋葬されるまでの間ゲニザと呼ばれる「倉庫」に一時的に保管された。ゲニザは大抵シナゴグ（ユダヤ教会堂）の奥室に設けられたものだが、後代の研究者にとって、大変貴重な研究資料を提供することとなった。有名なものとして、後882年に造られたカイロのエズラ・シナゴグのゲニザ文書がある。19世紀末葉から20世紀前葉にかけて収集された大量のヘブライ語文書群である。ベン・シラのヘブライ語訳、会堂で使用された詩篇、旧約聖書の写本などがそれである。

所謂ディアスポラのユダヤ人にとってヘブライ語が母語でなくなるとユダヤ教文書の翻訳が行なわれた。主なものにギリシャ語訳『セプトゥアギンタ』¹⁷とシリア語訳『ペシッタ』¹⁸などがあり、その他の古代語訳として『サマリア五書』¹⁹とアラム語訳²⁰がある。これらの翻訳聖書に対する神聖視は変わらなかったが、ヘブライ語原典聖書が共通語として最も重要視されたことはいうまでもない。

ラビのユダヤ教の時代になると、つまり前5世紀中葉に、バビロン捕囚の苦難を経験したユダヤ人共同体は古代イスラエルの宗教的遺産を生活の基本原則とした。バビロンから帰還を許された彼らは破壊されたソロモン神殿にかえて、所謂第2神殿を再建する。この共同体に民族の自立と独自性を与えた指導者は、バビロンからモーセの律法を持ち帰り、公衆の面前でトーラーの朗読と解説をしたエズラである。彼は聖典としてのトーラーを現実的に即して解釈を施した。エズラ以降、トーラー、つまり成文律法に加え、より広範な権威に基づく法規にも神聖な権威を認めるようになる。これは口伝律法と称される。これ以降千年もの間、口伝律法は拡大し続け、その量は膨大になる。長い間、口伝律法は口承で行われてきたが、後2世紀頃から成文化され、集成されていく。ユダヤ教の第一聖典が『旧約聖書』であるとするれば、第二聖典は『ミシュナ』²¹と呼ばれるもので、アラム語とギリシャ語の影響を受けたヘブライ語・ヘブライ文字で書かれた。ユダヤ教徒にとってはトーラーに次いで重要なものである。モーセがシナイ山で成文律法と不文律法を授けられたとされる伝承に基づくもので、トーラーと同じく神聖視された。さらに『ミシュナ』本文に基づく口伝律法の研究

が集積され、後6世紀頃までに編纂された第三の聖典『タルムッド』²²に発展する。本文はアラム文字で書かれている。これらの書は『旧約聖書』と並んでユダヤ人の精神文化の源泉となっている。

3. キリスト教

キリスト教はユダヤ教の一宗派として出発したが、民族の枠を超えることで世界宗教へと発展していくことになる。それを可能にしたのはキリスト教教義の「伝道」という概念の導入であった。そのさい際だった特徴のひとつは文字と宗教の関係であろう。4世紀に入り、キリスト教がローマ帝国の国教になることで、諸文書の正典化²³がおこなわれる。従って『新約聖書』が最も大切な文書となる。後1世紀から2世紀に書かれた新約聖書はイエス・キリストが使用したであろう西アラム語ではなく、コイネーギリシャ語²⁴といわれる平易なギリシャ語で書かれていた。このギリシャ語はより国際性の高い言語であったが、一般のキリスト教徒が聖書を読めるわけでもなかった。他方で、当時の広大な帝国の国教となりえたキリスト教はギリシャ語からラテン文字によるラテン語訳聖書を生みだした²⁵。

キリスト教が地中海世界に広く伝播した要因のひとつはこうした平易な言語の使用によるところが大きかった。同時にキリスト教の伝道に熱心な司祭や修道士たちの存在も見逃すことはできない。このキリスト教の伝道にとって欠かせない文書が『新約聖書』²⁶である。ユダヤ教同様に『新約聖書』は神聖視されたが、民族宗教としての枠を離れたキリスト教は文字の神聖視においてユダヤ教とは異なった道を歩むこととなる。新たな伝道地に赴くと、熱心な伝道者たちは文字のないところでは、文字を創り出して聖書を翻訳したのである。後4世紀にはエジプトのナイル川流域にコプト語の翻訳、アフリカ中部のエチオピアにはエチオピア語訳、さらに北海南岸ではゴート語訳が現われる。5世紀にはアルメニア語に、そして6世紀になるとイベリア半島のジョージア語に翻訳された。もっとも、これらの翻訳聖書の大半は部分訳であった。しかし翻訳を契機にして数々の文字が

生まれた意義は大きい。その後9世紀にははスラブ系文字やアラビア文字に翻訳された。中世の終焉とともに近世の民族国家が出現し、各国の言語に翻訳されることとなる。それらの代表的な言語文字として、ここではコプト文字、ゴート文字、スラブ(キリル)文字、アルメニア文字、そしてグルジア文字を取り上げる。

3.1 コプト文字

コプト文字はコプト教²⁷を信じるコプト人によって使用されている。コプト人とは古代エジプト人の後裔で、コプト文字は現在でもエチオピアとコプト系のキリスト教会で宗教的文書、具体的には聖書や賛歌に使用されている。

前4世紀になるとアレクサンドロス大王のエジプト遠征でギリシャ人が入植するが、しばらくはエジプト文字(聖刻文字、神官文字、民衆文字)が用いられた。しかし前3世紀になってキリスト教がエジプトまで伝えられると新しい文字が導入された。それがコプト文字である。コプト文字はギリシャ文字を基本形とし、それにギリシャ語にない音価に新たな文字を加えた。文字記号は総数31個で、そのうち新に加えた文字は7個である(図2)。その中には一つ音節文字(合字)を含んでいる。残りの借用文字はアルファベットからの考案である²⁸。借用にあたってエジプト文字が用いられなかった理由はキリスト教伝道者にとってエジプト文字が異教のものと思なされたからである。

コプト文字がいつ、どのようにして創られたか確定しきれていない。西暦2世紀頃のものと思われるミイラに巻かれていた布に書かれていたギリシャ文字があるが、この文字は既にギリシャ語にない音価をエジプトのデモティック文字に置き換えていることから、これがコプト文字使用の最初期のものと思われる²⁹。アレキサンドリアを中心に初期キリスト教が盛んに伝道されるにつれて、コプト語による聖書の翻訳や聖者伝が書かれるようになる。従って、これらの写本(図3)は初期キリスト教研究者にとって、大変貴重な資料である。コプト語で書かれた文書はキリスト教に関す

図2 コプト文字のアルファベット

Α	α	alfa	Ρ	ρ	ro(u)
Β	β	β	Σ	σ	si
Γ	γ	gamma	Τ	τ	ta
Δ	δ	dalda	Ϡ	Ϡ	he
Ε	ε	ei	Φ	φ	ph
Ζ	ζ	zita	Χ	χ	kh
Η	η	hīda	Ψ	ψ	(e)psi
Θ	θ	thīda	Ω	ω	au, ā
Ι	ι	joda	Ϡ	Ϡ	sei
Κ	κ	kappa	Ϡ	Ϡ	fei
Λ	λ	lola	Ϡ	Ϡ	hei
Μ	μ	mi	Ϡ	Ϡ	hori
Ν	ν	ni	Ϡ	Ϡ	h
Ξ	ξ	e(xi)	Ϡ	Ϡ	janja
Ο	ο	ou	Ϡ	Ϡ	dj
Π	π	bi	Ϡ	Ϡ	si
		p, b	Ϡ	Ϡ	tch
			Ϡ	Ϡ	di
			Ϡ	Ϡ	ti
			Ϡ	Ϡ	so(u)
			Ϡ	Ϡ	(6)

図3 コプト文字の写本

ΟΥΠΕΡΟΣ ΔΩΔΕΚΑ
 ΒΙΟΣ ΝΕΥΝΙΠΟΛΗΤΙΑ
 ΝΤΕΠΕΝΙΑΚΑΡΙΟΥΣΝ
 ΙΩΤΙΠΝΑΤΟΥΦΟΡΕ
 ΟΥΟΥΝΙΕΝΝΟΥΦΟΡΟΣ
 ΝΘΕΟΥΦΟΡΟΣ ΝΟΤΑΥ
 ΡΟΥΦΟΡΟΣ ΙΠΡΕΣΒΥ
 ΤΕΡΟΥΣΕΤΤΙΝΟΥΤ
 ΔΒΒΑΙΑΝΝΗΕΧΑΙΝΕ
 ΖΗΟΥΝΟΥΝΝΙΒΕΝΕΘ
 ΝΑΩΤΕΡΟΥΦΟΥΕ
 ΟΥΧΑΠΙΕΡΟΥΕΤΑΥ
 ΟΥΤΟΥΝΑΟΥΝΝΗΤΥΠ
 ΟΥΟΥΝΝΙΑΒΟΥΤΧΙΑΚ
 ΗΕΝΟΥΖΙΡΗΝΗΝΤΕΦ
 ΟΥΟΥΝΝΗΝ

るものばかりではない。初期キリストを解明するために重要な古代イランの宗教に起源するマニ教³⁰とそれと密接な関係にあるグノーシス主義³¹の教義を伝える文書が多く残されている。中でも1945年にナイル上流のナグ・ハマディーで発見されたナグ・ハマディー写本は当時の宗教共同体と思想を知るうえで最も重要な資料である。これらのうち『トマス福音書』(コーデックスII)は新約思想研究に新たな地平を開いた³²。

イスラーム教の拡張により、後8世紀になると大部分のエジプト人はアラビア語を用いるようになり、コプト教の教会を残してコプト文字は使用されなくなる。

3.2 ゴート文字

ゴート³³人はゲルマン民族に属する。ヨーロッパ中世初期のゲルマン民族の大移動にともない後2世紀中頃からスカンディナヴィア半島から南下し、北海北岸地帯に定着した。16世紀まではその子孫がクリミア半島に居住していたといわれるが、一部は北海から南部へ進出する。わけでも西ゴート族といわれる一派はギリシャを経てイタリアへ侵入して、ローマさえ占領する(西暦410年)。さらにフランスからスペインに向かい、しばらくの間この地を支配した。しかしイスラーム教の軍勢の前に滅亡する(後711年)とともに、その後はその土地に同化した。

4世紀半ば、ローマ・カトリック教会は彼らのキリスト教化を進めるため、カッパドキア出身の司教ウルフィラ(後318~388年)を遣わす。そこでウルフィラは文字をもたないゴート語のために新たにゴート文字を考案した。基本としたのはここでもギリシャ文字であった。全部で27個あるアルファベット式文字記号のうち、H, TH, J, U, R, S, F, Oの8個については新しく加えられた(図4)。これらがローマ字に由来するものなのか、それとも北欧に起源するルーン文字³⁴から借用されたものなのかよく分かってない。3個はルーネ文字からの借用らしい³⁵。伝道のための文字ということもあり、ゴート語による文書はもっぱらキリスト教関連のものに限られる。しかし今日まで残っている写本類はあまり多くない。最も有名な手写本はスウェーデンのウプサラ大学図書館に所蔵されている「コーデックス・アルゲンテウス」(図5)(銀の手写本)であろう。この名がつけられたのは赤色の羊皮紙に金で縁取りが施され、銀で『福音書』が書かれているからである。

3.3 アルメニア文字

アルメニア語はインド・ヨーロッパ語族に属し、かなり古い語形をとどめている。アルメニア文字と次節のグルジア文字は後5世紀に生まれた。アルメニア語はインド・ヨーロッパ語族であり、グルジア³⁶語はバスク・コーカサス語族と系統がまったく異なるにもかかわらず、音韻組織に共通

図4 ゴート文字アルファベット

ギリシア文字	文字	音価	数価	ギリシア文字	文字	音価	数価
A	ΑΑΛ	a, â	1		ϸ ϸ	j	60
B	ΒΒΚ	b	2		ΠΠ	u	70
Γ	ΓΡ	g, γ	3	Π	ΠΠ	p	80
Δ	ΔΔ	d	4		ϸ	—	90
E	ΕΕ	e	5	Ρ	ΡΚΧ	r	100
	ΥΥΑ	q	6	Σ	ΣΣ	s	200
Z	ΖΖ	z	7	Τ	ΤΤ	t	300
H	ΗΗ	h	8	Υ	ΥΥ	w, u	400
Θ	ΦΨ	p, (θ)	9	Φ	ΦΦ	f	500
I	ΙΙΙ	i	10	Χ	ΧΧ	χ (kh)	600
K	ΚΚ	k	20		ΘΘ	kv (kw)	700
Λ	ΛΛ	l	30	Ω	ΩΩ	o	800
M	ΜΜ	m	40		↑↑	(sampl)	900
N	ΝΝ	n	50				

図5 コーデックス=アルゲンテウス

ΑΤΤΑΝΝΣΑΡΦΝΙΝΗΙΜΙΝΑΜ'
 ΥΕΙΗΝΑΙΝΑΜΩΦΕΙΝ' ΟΙΜΑΙΦΙΝΑΙ
 ΝΑΣΣΝΣΦΕΙΝΣ' ΥΑΙΡΦΑΙΥΙΑΓΑ
 ΦΕΙΝΣ' ΣΥΕΙΝΗΙΜΙΝΑΓΑΗΑΝΑ
 ΑΙΡΦΑΙ' ΗΛΑΙΦ' ΟΝΣΑΡΑΝΑΦΑΝΑΣΙΝ
 ΤΕΙΝΑΝΤΙΦ' ΟΝΣΗΙΜΜΑΔΑΡΑ' ΓΑΗ
 ΑΦΛΕΤΟΝΣΦΑΤΕΙΣΚΟΛΑΝΣΣΙΓΑΗ

点が多いため、文字も似通っている。

この文字もキリスト教の伝道と関係して創られた。聖メスロープ(後441没)がギリシャ文字を基にして創ったと伝えられている。彼はシリア地方のエデッサに赴き、多くの言語を習得した後、36文字からなるアルメニア語に適合したアルファベットを考案した(図6)。先ずシリア語に基づいて

図6 アルメニア文字アルファベット

活字体			筆記体	音価	名称	活字体			筆記体	音価	名称
Ա	ա	Ա	ա	a	ayb	Մ	մ	Մ	մ	m	men
Բ	բ	Բ	բ	b	ben	Յ	յ	Յ	յ	y	yu
Գ	գ	Գ	գ	g	gim	Է	է	Է	է	n	nu
Դ	դ	Դ	դ	d	da	Ն	ն	Ն	ն	š	ša
Ե	ե	Ե	ե	e	eč	Օ	օ	Օ	օ	o	o
Զ	զ	Զ	զ	z	za	Չ	չ	Չ	չ	č(č')	ča
Է	է	Է	է	ē	ē	Պ	պ	Պ	պ	p	pē
Ը	ը	Ը	ը	ə	et'	Ջ	ջ	Ջ	ջ	j(dž)	jē
Թ	թ	Թ	թ	t	tō	Ի	ի	Ի	ի	ī	ra
Ձ	ղ	Ձ	ղ	ž	žō	Ս	ս	Ս	ս	s	sē
Ղ	լ	Ղ	լ	l	ln	Վ	վ	Վ	վ	v	vew
Ճ	ճ	Ճ	ճ	X(h)	xē	Տ	տ	Տ	տ	t	tiwn
Կ	կ	Կ	կ	c(ts)	ca	Ր	ր	Ր	ր	r	rē
Լ	լ	Լ	լ	k	ken	Տ	տ	Տ	տ	c(ts')	co
Ն	ն	Ն	ն	h	ho	Բ	բ	Բ	բ	w	hiwn
Շ	շ	Շ	շ	j(dz)	ja	Փ	փ	Փ	փ	p'	p'iwr
Չ	չ	Չ	չ	t(ch)	tat	Ք	ք	Ք	ք	k'	kē
Պ	պ	Պ	պ	č	čē	Օ	օ	Օ	օ	ō	ō
Պ	պ	Պ	պ			Ֆ	ֆ	Ֆ	ֆ	f	fē

ア翻訳がなされ、さらに正確をきすためにギリシャ語写本から改訳されたと伝えられている。

アルメニア文字で書かれた写本は多いにもかかわらず、古いものとなると少ない。そのためアルメニア文字の出自はイラン系（アラム系文字）とする説とギリシャ文字をこの文字の起源とする説に分かれる。しかし子音だけを表記するイラン系文字では言語系統の異なるアルメニア語の母音を表記するには不完全であった。さらにアルメニア文字はギリシャ語を原典とするキリスト教文書の翻訳が主たる目的であったことを考えると、ギリシャ語を母型にしたであろうことは容易に想像できる。

他にアルメニア文字がイラン系文字を基本にしなかった理由として、イラン系文字がアヴェスタ経典に使われた文字であって、キリスト教に対立する宗教の文字を借用するとは考えにくいことがあげられよう。

宗教的には多くのアルメニア人はキリスト教の一分派であるアルメニア教会に属している。アルメニア教会は聖ゲオルギウス（後332年頃殉教）

を聖者とする。彼は小アジアでキリスト教の伝道にあたった。

3.4 グルジア文字

アルメニアと隣接するグルジア文字はアルメニア文字と類似している。両者の出自は共通項をもつが、アルメニア文字の方が古い。伝承によれば、アルメニア文字を創った聖メスローブがグルジア文字も創ったとされる。ギリシャ文字を母型とすることは明らかである(図7)。ただ個々の字体はアルメニア文字に拠った可能性も高い。グルジア語自体はインド・ヨーロッパ語族ではないため、この言語の帰属をめぐって論争はあるが、バスク・コーカサス語系統に帰属させることが定説である。

図7 グルジア文字アルファベット

字形の変遷				ムヘドルリ Mhedruli		フツリ Hutsuri		音価	文字の名称	字形の変遷				ムヘドルリ Mhedruli		フツリ Hutsuri		音価	文字の名称
世紀				印刷体	筆記体	大文字	小文字			世紀				印刷体	筆記体	大文字	小文字		
5	10	11	15							5	10	11	15						
Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	a	an	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	Ⲁ	t	tar	
ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	b	ban	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	ⲁ	vi	vi	
Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	g	gan	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	Ⲃ	u	un	
ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	d	don	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	ⲃ	p	par	
Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	e	en	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	Ⲅ	q	qar	
ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	v	vin	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	ⲅ	š	šin	
Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	z	zen	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	Ⲇ	tš	tšin	
ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	η	he	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ⲇ	ts	tsan	
Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	t	tān	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	Ⲉ	dz	dzil	
ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	i	in	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	ⲉ	tš	tšar	
Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	k	kan	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	Ⲋ	h	han	
ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	l	las	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	ⲋ	h	har	
Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	m	man	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	Ⲍ	dž	džan	
ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	n	nar	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	ⲍ	h	hae	
Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	y	ye	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	Ⲏ	ho	hoe	
ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	o	on	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	ⲏ	f	fa	
Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	p	par	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	Ⲑ	—	—	
ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ž	žan	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	ⲑ	—	—	
Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	r	rae	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	Ⲓ	—	—	
ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	s	san	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	ⲓ	—	—	

*印は現在使われないもの

3.5 グラゴール文字

ヨーロッパにおけるギリシャ文字の系統として最後に現われる文字がグラゴール文字とキリル文字である。これらスラブ文字（ロシア文字系列）もキリスト教（ギリシャ正教）の拡張にともない考案された。後9世紀後半ギリシャ人祭司キュロスと兄メトディオスとともに、モラヴィア（現在のチェコの中中部）地方及びブルガリアの地でキリスト教の伝道活動を行なうさい、新約聖書を翻訳するため、グラゴール文字を創出した。したがって古教会スラブ語の文献はグラゴール文字で書かれている。翻訳の定本は当時ヴィザンチン教会で使用されていた福音書であったと考えられる。グラゴール文字という名称はスラブ語で *glagolu* 「語」、「ことば」の意味をもつ。グラゴール文字には40個の文字記号があるが、これは重子音 *st* という文字や *ya, yu, yo* といった半子音+母音を表す文字が含まれているからである。字形はかなり異形に見えるがギリシャ文字のうち小文字からの借用である(図8)。ただしコプト文字やキプロス文字などの利用も考えられる。キリル文字に約50年先行して成立したと思われる。

この地域—モラヴィア・ブルガリア—はローマ・カトリック教会の布教領域であったこともあり、ギリシャ正教の後退とともに、やがてグラゴール文字はこの地域では用いられなくなる。しかしながらスラブ語にはギリシャ語がもたない音素が存在し、それがグラゴール文字では表記できたため、バルカン半島の西部においては発展した。

3.6 キリル文字

キリル文字は後のスラブ文字の祖形となることから、今日のロシア文字に類似している。キリル文字の名称はキリスト教伝道者キュリオスの名からとられた。確かにキリル文字はこの司祭キュロスにちなんで名づけられたとしても、キリル文字はのちにグラゴール文字を改良したふしがある。キュロスとメトディオスが翻訳に際してグラゴール文字を考案し、これにクレメンスという司祭が手を加えてできた文字がキリル文字だと考えられている³⁷。文字数は43個で、大半がギリシャ文字からの借用である(図

図8 グラゴール文字アルファベット

ギリシア文字 (草体)	グラゴール文字					ギリシア文字 (草体)	グラゴール文字				
	初期	後期		名称	音価		初期	後期		名称	音価
		ブルガリア	クロアチア					ブルガリア	クロアチア		
A Δ Ϝ	Ⲁ ⲁ	Ⲃ ⲃ	Ⲅ ⲅ	Az	a	Ⲇ ⲇ	Ⲉ ⲉ	Ⲋ ⲋ	Uk	u	
B b @	Ⲍ ⲍ	Ⲏ ⲏ	Ⲑ ⲑ	Buk1	b	Ⲓ ⲓ	Ⲕ ⲕ	Fert	f		
ⲕ Ⲗ ⲗ	Ⲙ ⲙ	Ⲛ ⲛ	ⲝ Ⲟ	Vedi	v	ⲟ Ⲡ	ⲡ Ⲣ	Kher	x(kh)		
Γ γ Ϛ	Ⲝ ⲝ	ⲟ Ⲡ	ⲡ Ⲣ	Glagol	g	ⲣ Ⲥ	Ⲧ ⲧ	Ot	ö		
Δ δ ϛ	ⲩ Ⲫ	ⲫ Ⲭ	ⲭ Ⲯ	Dobro	d	ⲯ = Ⲱ	ⲱ Ⲳ	Sha	sh		
ε f Ϝ	ⲳ Ⲵ	ⲵ Ⲷ	ⲷ Ⲹ	Est'	e	ⲹ = Ⲻ ⲻ	Ⲽ ⲽ	Shta	sht		
ζ = τ Ϟ	ⲿ Ⲁ	ⲁ Ⲃ	ⲃ Ⲅ	Zhivete	zh	Ⲇ ⲇ	Ⲉ ⲉ	Tsi	ts		
Z z ϟ	Ⲋ ⲋ	Ⲍ ⲍ	Ⲏ ⲏ	Zelo	dz	Ⲑ ⲑ	Ⲓ ⲓ	Cherv	ch(tsh)		
θ = ⲱ Ϡ	ⲏ Ⲑ	ⲑ Ⲓ	ⲓ Ⲕ	Zemlya	z	ⲕ Ⲍ	ⲍ Ⲏ	Djerv	dj		
H h ϡ	ⲟ Ⲡ	ⲡ Ⲣ	ⲣ Ⲥ	Izhe	ê, i	ⲧ Ⲩ	ⲩ Ⲫ	Yet	ya.ye		
δ = ε i, ï = ι	ⲫ Ⲭ	ⲭ Ⲯ	ⲯ Ⲱ	I	y, i	Ⲳ ⲳ	Ⲵ ⲵ	Yu	yu		
K k ϣ	Ⲷ ⲷ	Ⲹ ⲹ	Ⲻ ⲻ	Kako	k	ⲽ ⲿ	ⲁ Ⲃ	Yer	ö, e		
λ λ ϛ	ⲃ Ⲅ	ⲅ Ⲇ	ⲇ Ⲉ	Lyudi	l	Ⲋ ⲋ	Ⲍ ⲍ	Yery	y		
M m Ϟ	ⲏ Ⲑ	ⲑ Ⲓ	ⲓ Ⲕ	Muislite	m	Ⲇ ⲇ	Ⲉ ⲉ	Yerek	e, i		
N n ϟ	Ⲋ ⲋ	Ⲍ ⲍ	Ⲏ ⲏ	Nash	n	Ⲑ ⲑ	Ⲓ ⲓ	Es	eng		
o Ϡ	ⲏ Ⲑ	ⲑ Ⲓ	ⲓ Ⲕ	On	o	Ⲇ ⲇ	Ⲉ ⲉ	Yes	yeng		
π π ϡ	Ⲷ ⲷ	Ⲹ ⲹ	Ⲻ ⲻ	Pokoy	p	ⲽ ⲿ	ⲁ Ⲃ	As	ong		
ρ ϑ Ϝ	ⲳ Ⲵ	ⲵ Ⲷ	ⲷ Ⲹ	Retsi	r	ⲹ Ⲻ	Ⲽ ⲽ	Yas	yong		
σ ϡ ϛ	ⲩ Ⲫ	ⲫ Ⲭ	ⲭ Ⲯ	Slovo	s	ⲯ Ⲱ	ⲱ Ⲳ	Thita	θ(th)		
T τ Ϟ	ⲿ Ⲁ	ⲁ Ⲃ	ⲃ Ⲅ	Tverdo	t	Ⲇ ⲇ	Ⲉ ⲉ	Izitsa	ù		

9)。ピョートル大帝の治世に34字に削減された。これらのうちあるものは前述のコプト文字やサマリア文字と類似が認められるため、それらの文字からの借用と主張する説もある。しかしながら地域的にかなりかけ離れた文字体系をもつ文字の一部の字形だけを借用したということはない³⁸。これらの新たに創られた文字はギリシャ文字の大文字とグラゴール文字の簡略から取り入れたとするほうが妥当であろう。

グラゴール文字とキリル文字は数奇な運命を辿ることになるのだが、それはキリスト教の歴史によってもたらされた。後9世紀のコンスタンチヌーポリス会議にはじまる教会成立は11世紀に至って、ローマ公教(カトリック)とギリシャ正教(オーソドックス)に分裂する。そのことによって同じスラブ民族の言葉は二分割されることになる。ローマ公教会に所属

図9 キリル文字アルファベット

ギリシア文字	グラゴル文字		キリル文字				ギリシア文字	グラゴル文字		キリル文字			
	字母	数価	字母	数価	音価	由来		字母	数価	字母	数価	音価	由来
A	Α	1	А	1	a	ギリ	Ϝ	500	Ф	500	f	ギリ	
B	Β	2	В	2	b	新作	Ϙ	600	Х	600	h	・	
C	Γ	3	С	3	v	ギリ	Ϟ	700	Ц	800	o	・	
D	Δ	4	Д	4	g	・	Ϝ	800	Ч		št	グ	
E	Ε	5	Е	5	d	・	Ϟ	900	Ц	900	C(ʈs)	・	
		6		6	e	・		1000		90	č(ʈs)	・	
		7		7	ž	グ					š	・	
		8		8	dz	?					ʔ(ü)	?	
Z	Ζ	9	З	9	z	ギリ					y	ʔ+i	
H	Η	10	И	10	i	・					ʔ(ʈ)	?	
		20		20	í	・					ě	?	
		30		30	g	・					yu	ʈ+o	
K	Κ	40	К	40	k	ギリ					ya	ʈ+Δ	
		50		50	l	・				900	ye	ʈ+E	
M	Μ	60	М	60	m	・					e	グ	
		70		70	n	・					e	?	
N	Ν	80	Н	80	o	・					ye	ʈ+A	
O	Ο	90	О	90	p	・					yq	ʈ+ʈ	
P	Ρ	100	Р	100	r	・				60	ks	ギリ	
		200		200	s	・				700	ps	・	
		300		300	t	・				9	th	・	
		400		400	u	・				400	ú	・	

由来欄のギリはギリシア文字，グはグラゴル文字からきたことを示す。

するポーランド人，チェコ人，スロバキア人，スロヴェニア人，クロアチア人はラテン・アルファベット系文字を使うようになり，ギリシャ正教系のスラブ人，つまりブルガリア人，セルビア人，ウクライナ人，ロシア人はキリル・アルファベットを用いることになった。ルーマニア人はキリル文字を使用していたが，のちにラテン文字を用いるようになった。旧ユーゴスラヴィア問題の背景に文字と宗教が密接に絡み合っていたのである。クロアチアではカトリックのためラテン・アルファベットが用いられ，ギリシャ正教のセルビアではキリル文字が使われていた。

4. イスラーム教

イスラーム教と文字文化の関係はユダヤ教のそれに近い。ただしユダヤ教が民族宗教であるのに対し、イスラーム教が世界宗教であることによって、大きな差異が生じた。またキリスト教との関係でいえばまさしく正反対、つまりユダヤ教やイスラーム教が聖典として文字を固定化してきたが、キリスト教はむしろ伝道目的に聖書の翻訳をとおり様々な文字の考案に手を貸してきた。

文字の考案は大抵の場合、都市の建設と定住が前提となる。したがって移動する隊商の民にとって文字は必ずしも必要不可欠な道具ではなかった。アラビア人の間に文字の使用が定着した時、その文字はアラム系のナバタイ文字であった。イスラーム教はアラビア文字を用いているが、その直系となるとナバタイ文字まで遡らなければならない。ナバタイ人は前2世紀から後2世紀にかけて王国にまで発展して、ペトラを首都とした。ペトラは今のヨルダン南部に位置し、岩窟の墓陵などで知られる。ナバタイ人はネゲブ、シナイ半島からヨルダン近辺で半遊牧民として生活していたアラブ系民族である。ナバタイという呼称はローマ人よるもので、アラビア語では「アル・アンバート」と言われていた。彼等はアラム文字³⁹を使用して墓碑銘などの短い刻文を岩山などに刻んでいるけれども、書字体の不統一が目立つ。やがてナバタイ文字で書かれたアラム語がアラビア文字風に変化し、後4世紀になると不完全ながら現在のアラビア文字の原型が生まれたと考えられる(図10)。しかしアラム系ナバタイ文字の影響は認められるものの、それを保証する明確な碑文は発見されていない⁴⁰。実際4世紀のアラビア文字B, N, T, Y, THは同様な文字で表記されたし、一つの文字に15個の音価が与えられるものまであった。

このような煩雑さを避けるため表記法の改善に努めたのはイスラーム教である。イスラームの勃興とともに、古アラビア文字は姿を消すことになる。後8世紀になると子音の傍らに母音を付す表記法が考案され、今日に至っている。合字の結果同じ書体となっていたB, N, T, Y, THは弁別

記号が用いられるようになる。改良されたアラビア文字はなによりもコーランの文字となった。

イスラーム教の教祖ムハンマドは(後632年没)アッラーから受けた啓示を弟子たちに語り伝えたが、当初は口伝として残され、文書として書きとめられることはなかったようである。しかし伝承(ハディース)によると、ムハンマドの啓示によることば『コーラン』は彼の死後数年にし

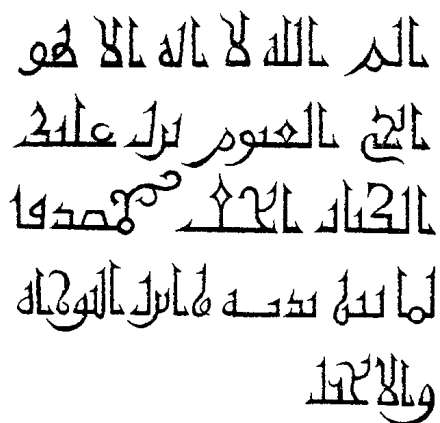
図10 アラビア文字の発達

音価	アラビア文字	ナバタイ文字	新シナイ文字	マンデ文字	早期アラビア文字6世紀	アラビア文字					
						8世紀	ク-フィク	マグリブ	初期ナスヒー	カマト	現代ナスヒー
・	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌
b	ب	𐤁	𐤁	𐤁	𐤁	ب	ب	ب	ب	ب	ب
g	ج	𐤄	𐤄	𐤄	𐤄	ج	ج	ج	ج	ج	ج
d	د	𐤃	𐤃	𐤃	𐤃	د	د	د	د	د	د
h	ه	𐤅	𐤅	𐤅	𐤅	ه	ه	ه	ه	ه	ه
w	و	𐤆	𐤆	𐤆	𐤆	و	و	و	و	و	و
z	ز	𐤇	𐤇	𐤇	𐤇	ز	ز	ز	ز	ز	ز
h	ح	𐤈	𐤈	𐤈	𐤈	ح	ح	ح	ح	ح	ح
t	ط	𐤉	𐤉	𐤉	𐤉	ط	ط	ط	ط	ط	ط
J(y)	ي	𐤊	𐤊	𐤊	𐤊	ي	ي	ي	ي	ي	ي
k	ك	𐤋	𐤋	𐤋	𐤋	ك	ك	ك	ك	ك	ك
l	ل	𐤌	𐤌	𐤌	𐤌	ل	ل	ل	ل	ل	ل
m	م	𐤍	𐤍	𐤍	𐤍	م	م	م	م	م	م
n	ن	𐤎	𐤎	𐤎	𐤎	ن	ن	ن	ن	ن	ن
s	س	𐤏	𐤏	𐤏	𐤏	س	س	س	س	س	س
・	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌	◌
p,f	ف	𐤑	𐤑	𐤑	𐤑	ف	ف	ف	ف	ف	ف
s	ص	𐤒	𐤒	𐤒	𐤒	ص	ص	ص	ص	ص	ص
q	ق	𐤓	𐤓	𐤓	𐤓	ق	ق	ق	ق	ق	ق
r	ر	𐤔	𐤔	𐤔	𐤔	ر	ر	ر	ر	ر	ر
š	ش	𐤕	𐤕	𐤕	𐤕	ش	ش	ش	ش	ش	ش
t	ت	𐤖	𐤖	𐤖	𐤖	ت	ت	ت	ت	ت	ت

て様々な書材から収集されたといわれる。したがって『コーラン』は当初断片的に文書化されていたものと思われる。この点ではキリスト教における、福音書、つまりイエスの語録集と同様な経緯を辿ったといえる。この『コーラン』は初めカーリウ（読誦者）によって伝えられた。しかし伝えるカーリウによってアッラーの啓示が変わるのでは困惑するという理由で、第3代教主ウスマーンのとときに（後646年）、編集と編纂がおこなわれ、全114章6211句からなるほぼ現行の『コーラン』となった。編纂の過程についてはよくわからない。古い写本が現存しないからである。最古の写本は8世紀のもので、クーフィック体といわれる独特の書体が用いられている。イスラーム教では『コーラン』にアッラーとムハンマドの姿を描くことを硬く禁じた。その結果、極めて装飾性の高いクーフィック書体（図11）が生まれた。全体に角張っていて、荘重感にあふれている。13世紀以降はナスヒー書体（図12）にとって変わることになるが、装飾書体として今日でも使用されている。洗練された優美な特徴をもつナスヒー書体はクーフィック書体の行書体に喩えることができよう。パピルスにペン書きすることから、丸みをおびた線状文字が発達した⁴¹。

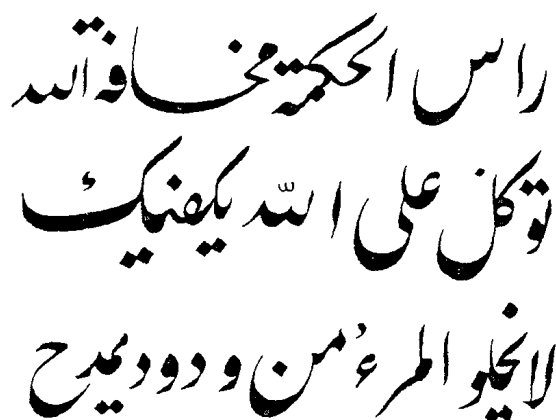
イスラーム教徒にとってアラビア文字は聖なる文字とされる。その理由は『コーラン』はアッラーのことばそのものだからである。この意味は『聖書』や『仏典』と比較するとき、編纂上の大きな相違となって現れる。この相違のなかにこそ『コーラン』の独自性が認められよう。聖書文献学の

図11 クーフィック体



الم الله لا اله الا هو
 النبي المصوم بره عليه
 السلام الم الم
 لما لله لله الم الم
 والالم

図12 ナスヒー体



راس الحكيم من اوله
 وكل على الله يفتيك
 لا يخلو المرء من وود ويح

貢献は福音書の編纂には記者の編集と解釈が施されており、真正なイエスのことばを取り出すことは殆ど不可能に近いことを明らかにした。各福音書記者は既に存在したパウロの手紙を知っていたし、各地に流布していたイエスに関する語録集などが存在していた。記者たちは緒文書を独自の仕方採用し、編集と解釈を加えたのである。仏典についても同様なことがいえる。ブッダ自身のことばだけでなく、後世の学者たちがブッダの思想として解釈したものをブッダの名によって表現したものも多く含まれている。これに比べると、『コーラン』は一語一語神のことばであって、人間がこれに手を入れることは絶対にできなかった。カリフ・ウスマーンのもとで、神に啓示されたことばのみが、比較的長いものから短いものへと順次配列された。図式化していえば、『聖書』や『仏典』は重層的ことば(編集と解釈)であるが、『コーラン』のことばは単層的、つまり神のことばのみによって成り立っている⁴²。

したがってイスラーム教徒にとって『コーラン』のことばであるアラビア語の学習は必須の条件になった。イスラーム教の布教にともないアラビア文字の伝播がはじまる。世界宗教となる過程でキリスト教とイスラーム教の決定的な相違が現われる。キリスト教は『聖書』の翻訳を伝道の基本的手段とすることによって、各地の言語文字を創ってきた。他方イスラーム教は『コーラン』の翻訳を厳禁してきたのである⁴³。アラビア語の学習は各地のモスクに付属する学校、マドラサで行われた。このためイスラーム教圏ではアラビア語が広範囲にわたって使用されるとともに、アラビア文字も一般化された。イラン(ペルシャ語)、アフガニスタン(パシュトゥ語など)、パキスタン(ウルドゥ語など)をはじめとして、かつてのトルコやトルキスタン(オスマン・トルコ語など)、東部アフリカ(スワヒリ語など)、インドネシア(マライ語など)においても使用された。しかしながら今日トルコ語やスワヒリ語はラテン・アルファベットが用いられている。その理由は近代以降ヨーロッパ諸国の勢力が優位であったことと、これらの言語は母音の数が多いため、アラビア文字の3個の母音(長母音を加えると6個)では十分表記しきれなかったからである。

5. 仏 教

紀元前 2000 年頃古代インダス川流域で印章文字 (原インド文字) が用いられていた⁴⁴。おそらく表意文字の一種であったと考えられる。しかしその文字の伝統は長く続かなかつたらしい。紀元前 1500 年には消滅してしまう。

文字の使用が再び認められるようになるのは前 5 – 3 世紀になってからである。ペルシャ王ダリウス一世 (前 522–486 年) によるインド征服とアレクサンドロス大王のインド制覇を経て前 3 世紀になって 2 つの文字が現われる。つまりフェニキア文字の系統につながるアラム文字がこの地域に入ってくることで、ブラーフミ文字とカロシュティー文字が創られる。

5.1 カロシュティー文字

カロシュティー文字は前 5 世紀から 3 世紀にかけてインド北西部とアフガニスタン地方で使用された。フェニキア文字やアラム文字と同様右から左に書かれていて、カロシュティー文字がアラム文字の系統に属することを示している。貨幣や碑銘に刻まれたこの文字はアラム文字と比較すると既に多様な変容が認められる (図 13)。この事実はセム系アラム語が子音のみによって構成されるのにたいし、インド・ヨーロッパ語族に属するインド語は母音が重要視されたため、アラム文字になかった母音を表す文字が必要とされた当然な結果であった。しかし、この時期の文字は宗教との深いかかわりはなかったに違いない。アラム語がインド大陸に入ってきた経緯は宗教的活動によるものではなく、アラム商人の商業活動によるものであった。アラム語は当時ペルシャ人とギリシャ人の共通語であって、インド周辺でも経済行政文書は普通アラム語で記録された。アラム語は国際語としての位置を占めていたのである。

この文字は複音節が多いため、それだけ文字は複雑を極め、中国西域出土のある木簡の場合でも 250 個を超える⁴⁵。この複雑さのゆえに、カロシュティー文字にとって代わってブラーフミ文字がインドの文字となる。

図13 カロシュティー文字

アラム文字との比較

音価	アラム文字 前5~3世紀 の文字	初期カロシュティー文字 引きつ いた形	音価
・	כ מ	𐤒	a
b	ב ב	𐤑	ba
g	ג ג	𐤓	ga
d	ד ד	𐤔 𐤕	da
h	ה ה	𐤖 𐤗	ha
w	ו ו	𐤘	va
z	ז ז	𐤙 𐤚	ša
ḥ	ח ח	𐤛	sa
j	י י	𐤜	ya
k	כ כ	𐤝	ka
l	ל ל	𐤞	la
m	מ מ	𐤟 𐤠	ma
n	נ נ	𐤡 𐤢	na
s	ס ס	𐤣	sa
p	פ פ	𐤤 𐤥	pa
š	ש ש	𐤦	ča
q	ק ק	𐤧	kha
r	ר ר	𐤨	ra
š	ש ש	𐤩	ša
t	ת ת	𐤪	ta

5.2 ブラーフミ文字

カロシュティー文字はその後継承されることはなかった。それに対してブラーフミ文字は多くの文字の考案に貢献した。字形から見るかぎり、フェニキア文字とブラーフミ文字との字体の類似は明らかである(図14)。この

文字から北方のグプタ文字，中央アジアのチベット文字，南方のタミール文字，東方のパーリ文字などが生まれた。

ブラーフミ文字が仏教と関係をもちはじめるのはアショーカ王（前250年頃）の時代に入ってからになる。仏教の興隆につとめた王はブラーフミ文字（一部カロシュティー文字）を使って数多くの法勅を岸壁や石柱に刻ませている。こうした碑文はアショーカ王碑文の名で知られ，40以上の碑文が確認されている⁴⁶。この文字から少なくとも7種類以上の文字が創作された。

その一つがブラーフミ文字の子孫としては最古の文字で，王朝名を取って名づけられたグプタ文字（後4－6世紀）である。この文字は仏教の拡張にともない中央アジアへ入ると，トルキスタンの古代語の文字となり，

図14 ブラーフミー基本文字字音表

フェニキア 文 字	ブラーフミー文字		
	引継いだ形	音 価	新しく作られた字形
・	𐤀	a	𑀀 ā
b	𐤁	ba	𑀁 bha
g	𐤂	ga	𑀂 gha
d	𐤃	dha	𑀃 da 𑀄 ḍa 𑀅 ḍha
h	𐤄	ha	
w	𐤅	va	𑀆 u 𑀇 ū 𑀈 𑀉 o
z	𐤆	ḡa	𑀊 ḡha
ḥ	𐤇	gha	
t	𐤈	tha	𑀋 ṭha 𑀌 ṭa
j	𐤉	ya	
k	𐤊	ka	
l	𐤋	la	𑀍 ḷa
m	𐤌	ma	・ -ṃ
n	𐤍	na	𑀎 ṇa 𑀏 ṇa 𑀐 nu
s	𐤎	śa	𑀑 ṣa 𑀒 śa
・	𐤏	e	𑀓 ai 𑀔 i 𑀕 ī
p	𐤐	pa	𑀖 pha
ṣ	𐤑	ḥa	𑀗 ḥa
q	𐤒	kha	
r	𐤓	ra	
ś	𐤔	śa	
t	𐤕	ta	

後にはチベット文字の誕生に力を貸すことになる。チベットではグプタ文字を基調にして別の文字が創られた。伝承によれば、後7世紀チベット王が仏教に改宗したさい、経典をチベット語に翻訳するためチベット語が考案されたとされている。この伝承はいかに宗教が文字の誕生に深く関わっているかを示す良い例である。

ブラーフミ文字からナーガリー文字に発展する(図15)。Nagariはインド語で「都の」を表す形容詞女性形で、ナーガリー文字は「都文字」を意味する。今日ではデーヴァナガリー「聖都文字」(図16)と呼ばれて、ヒンディ語と経典語であるサンスクリットの表記に用いられている。ナーガリー文字は上部に横線(マトラ)を書くのが特徴である。母音は上下左右に記号を付けて表す。

この文字の系統は仏教の東南アジアへの布教とともに独自の発展をとげる。ビルマ文字、タイ文字、ジャワ文字、そしてクメール文字が創られた。もともとこれらの文字は仏教の言語であるパーリ語を表記するため考案されたものである。仏教の布教は各地で文字の重要性を高めた。換言すれば、結果として、アラム・インド系文字はサンスクリット語、チベット語、さらに南インド系文字で書かれたパーリ語の経典として伝播されることとなった。

図15 ナーガリー文字

व्यवहारानृपः पश्येद्विद्विर्बाह्मणीः मरु ।
धर्मशास्त्रानुसारेण क्रोधन्लोभविवर्जितः ॥१॥

図16 『バーガヴァダ・ギーター』より
(左がサンスクリット, 右がそのヒンディー語の韻文)

अनेकवक्त्रनयनमनेकाद्भुतदर्शनम् ।	मुख नयन थे उसमें अनेकों ही अनोखा रूप था ।
अनेकदिव्याभरणं दिव्यानेकोद्यतायुधम् ॥	पहिने अनेकों दिव्य गहने शस्त्र-साज अनूप था ॥
दिव्यमाल्याम्बरधरं दिव्यगन्धानुलेपनम् ।	सीमा-रहित अद्भुत महा ब्रह विश्वतोमुख रूप था ।
सर्वाश्चर्यमयं देवमनन्तं विश्वतोमुखम् ॥	धारण किये अति दिव्य माला वस्त्र गन्ध अनूप था ॥

おわりに

文字の起源とは別に、文字の考案と伝播に宗教が深く関与したことは明らかである。

われわれの場合、東地中海を中心にして、西アジアから東アジアの各地に広がった文字文化と宗教の関係について考察してきた。フェニキア文字とアラム文字はこれらの文字を基点として、西と東に考案と伝播のダイナミズムを展開した。これを可能にしたのは経典の文字化であるが、文字化の過程で諸宗教の間に少なからず確かな特徴が認められる。われわれの考察対象から明らかになった事実は以下のとおりである。

(1) 上記諸宗教における教典・聖典の神聖視は明確である。しかし、これらの教典文字がエジプト聖刻文字や楔形文字のように複雑なシステムをもつ文字組織であったとすれば、聖典化のプロセスは存在しなかったか、困難なものであったに違いない。フェニキア・アラム文字のようなアルファベット文字の誕生によって、つまり文字の簡素化によって「知」の民主化がなされた。もちろん一般民衆が聖典を読むことができるようになるのはずっと後のことになるが、それにもかかわらず、アルファベット文字の誕生は聖典の編纂化を急速に促進し、その広範な伝播の原動力となった。

(2) ユダヤ教における聖典文書神聖視の固有性はわけても神名 YHWY の呼称と律法(トーラー)に見られる。神聖視の結果として、神名 YHWH の正確な音読さえ失うことになるが、アラム・ヘブライ文字を用いられたクムラン写本のなかで、YHWH の4文字のみがより古いフェニキア・ヘブライ文字を継承していることから、神名 YHWH の特別視は容易に確認できる。のち成文律法と口伝律法が『旧約聖書』、『ミシュナ』、『タルムッド』の3聖典に発展する。

イスラーム教の場合、『コーラン』の翻訳が厳禁されたため、文字の神聖視は文字の装飾性を高め、芸術や呪詛的装飾さえも生みだした。

(3) キリスト教は伝道する宗教となることで、その拡大に伴い聖典(『聖書』)の翻訳を積極的に進めた。文字をもたなかった地域においては新しい文字

を考案する契機となった。とりわけ初期キリスト教から教父の時代にギリシャ・ローマ文字からコプト文字，ゴート文字，スラブ（キリル）文字，アルメニア文字，そしてグルジア文字などが創られた。ヨーロッパ諸国の文字がこの系統に属することはいうまでもない。ユダヤ教も翻訳された『旧約聖書』をもつが，キリスト教の場合と事情は全く異なる。民族の離散によって異境の地で定住をよぎなくされたユダヤ人はヘブライ語聖書を理解できない自民族のために翻訳をおこなったのである。しかし翻訳はこの民族の範囲を超えることは決してなかった。

イスラーム教も布教をとおして拡張を続けた。しかし文字の神聖視はアラビア文字に限定され，各地に拡大を続けたイスラーム教は『コーラン』の翻訳を許すことはなかった。後7世紀以降のイスラームの領土拡大によって，アラビア文字の使用は西アジアはもとより北アフリカ，東南アジアまで伝播するが，イランやトルコのようにその後ペルシャ語やトルコ語が民族語として用いられる。それにもかかわらず，アラビア文字はイスラーム教緒国では宗教・文化語として大切にされている。

仏教は東南アジアへの布教とともに独自の発展をとげた。布教とともに，ビルマ文字，タイ文字，ジャワ文字，そしてクメール文字などが考案された。もともとこれらの文字は仏教の教典言語であるパーリ語を表記することを目的にしたものである。したがって綴字法上南方インド系，つまりはセム系文字の系譜に属するが，言語的には孤立語が多い。

(4)聖典の神聖視の延長線上に文書化の問題がある。イスラーム教の場合『コーラン』は一語一語神のことばであって，人間がこれに手を入れることは絶対にできなかった。編集や解釈を施す余地は皆無であった。カリフ・ウスマーンのもとで，神に啓示されたことばのみが比較的長いものから短いものへと順次配列された。他方，ユダヤ教とキリスト教の『聖書』や仏教の『仏典』はむしろ編集と解釈を加えられた文書である。福音書の編纂についていえば，記者の編集と解釈によって，真正なイエスのことばを取り出すことは殆ど不可能に近いことが明らかになった。記者たちは諸文書を独自の仕方採用し，編集と解釈を加えたのである。仏典についても同






様なことがいえる。ブツダ自身のことばだけでなく、後世の学者たちがブツダの思想として解釈したものをブツダの名によって表現したものも多く含まれている。

注

- ¹ この経緯については J. ボッテロが背景と弁証法的思考にいたる論考をしている。J. Bottéro, *MÉSOPOTAMIE, L'écriture, la raison et les dieux* (Éditions Gallimard, Paris, 1987). 邦訳は松島英子訳『メソポタミア 文字・理性・神々』(東京, 法政大学出版局, 1998 年), 104-156 頁参照。Cf. I. J. Gelb, *A Study of Writing*, (Chicago, 1962), 60-119.
- ² 同様な表記現象を楔形文字の発展に見ることができる。注 11 参照。
- ³ 言語のについては、分類の仕方によって様々な捉え方がある。2001 年 2 月開かれた国連環境計画 (UNEP) の閣僚級環境フォーラムの報告は 5000 語から 7000 語とみている。しかし 2500 語以上の言語が「絶滅」の危機に瀕していることが報告されている。
- ⁴ 前 2900 年-2600 年 初期第 1 - 第 2 王朝。この時期に古拙ウル文書が認められる。
前 2600 年-2334 年 初期第 2 - 第 3 王朝。ファラ文書, アブー・サラビーフ文書, エブラ文書群と数多くの文書が確認されている。
- ⁵ この地域は古くから中近東と呼称されてきた。これはヨーロッパを中心にして見た地理学的地域であり, 最近では西アジアと呼ばれるほうが多い。この地域の古代文化については広くメソポタミアという呼称を用いられるのが一般的である。この問題は三笠宮崇仁殿下の特別寄稿文「日本における古代オリエント文明研究史」のなかで, 取り上げられている『オリエント』第 43 巻第 2 号 (2000 年), 1-2 頁。
- ⁶ この主題については, 矢島文夫著『文字学の楽しみ』(東京, 大修館, 1977), 102-127 頁において, 文字と宗教として取り上げられている。
- ⁷ ヨーロッパ中世とくに十字軍以前のユダヤ人はイスラーム世界とキリスト教世界において, 宗教的問題として扱われてきた。しかし 19 世紀以降になると市民社会が近代国家のなかで形成されるという枠組みのなかで, 国家をもたないユダヤ人はもはや宗教的問題としてではなく, 民族的, 人種的差別のターゲットとなった。こうして「ユダヤ人」という概念ができあがる。例えば,

ドイツ、オーストリア、フランスにおける反ユダヤ主義（アンチ・セミチズム）。

- 8 現代のユダヤ法によれば、ユダヤ人とは、母親がユダヤ人であるか、ラビの指導のもとにユダヤ教に改宗した者である。ここで言う改宗は布教の結果と区別しなければならない。
- 9 西アジア諸民族の言語群にたいして用いられる。通常3種の言語群に分類される。1. メソポタミアの東セム語（アッカド語、バビロニア語など）、2. 北西セム語（カナン語系とアラム語系）、3. 南セム語（アラビア語諸方言）。エチオピア語も3. に含まれる。
- 10 ヘブルと表記するほうが原音に近いが、ここではヘレニズム時代のギリシャ語の音訳に遡る名称を用いることにする。
- 11 フェニキア文字は「原シナイ文字」の直系の子孫であると考えられている。ヘブライ文字、アラム文字、ギリシャ文字はフェニキア文字に由来する。シナイのセラ・ピト・アル・ハーディムから出土した碑文の記号は30個ほどであるため、音節文字ではなく、アルファベットであることが分かった。この文字は「原シナイ文字」と呼ばれる。前15世紀ころに考案されたらしい。この時期にゲゼル出土の「カナン文字」（前17-12世紀）も散見され、「原シナイ文字」と「原「カナン文字」」を合わせて「原カナン文字」と呼ぶことがある。Cf. J. Naveh, *Early History of the Alphabet* (Jerusalem, Magnes Press, The Hebrew University, 1982)。これらの文字の発明の背景にエジプト文字からの刺激があったことは明らかであろう。「原カナン文字」からフェニキア・アルファベットまでの経緯についての論考はこれ以上言及しない。

最古のヘブライ文字はフェニキア文字で書かれた。ゲゼル・カレンダー（前10世紀頃）は当時のヘブライ語が , ,  の間の明確な区別をしていなかったことを示している。 の左右上方部に点を打って弁別する表記法は2000年も後になってからのことである。フェニキア文字では  は弁別されなかった。

楔形文字やエジプト聖刻文字の体系は複雑で、それを読み書きするためには膨大な数の記号や文字を覚える必要があった。しかしアルファベット文字は基本的には30前後の文字を記憶すれば足りることを考えると、「知」の大衆化をもたらせた画期的考案であった。

シリアの地中海沿岸（ラス・シャームラ遺跡）に現れたウガリット文字は少なくとも前14世紀のアルファベット文字では30個の単音節文字である。明らかに楔形文字を借用し、それを簡略化して考案されたことは明確である。

文字の現象学としては日本語における漢字からカタ仮名を創作する簡略化と同じである。さらに日本語の漢字仮名混じり文についていえば楔形文字におけるアッカド語の表記法に同様な現象が見られる。楔形文字表記の発展のなかに日本語における文字表記法を看取することができることは興味深い。

21個の子音文字からなるフェニキア文字は地中海全域にいきわたるが、この文字がいつ頃までにイベリア半島に行き着いたかを確かめることは困難である。初期フェニキア語碑文として知られているサルデニア島のノラ石碑は前9世紀のものとされている。したがって、この時期の前後には東地中海のフェニキア人が地中海で植民活動を活発に展開していたと考えられる。矢島文夫「地中海の言語の歴史」、『言語』27巻10号(1998年)、28-29頁を参照。原シナイ文字からラテン・アルファベット文字の対照表については(図17)を参照。

- ¹² トーラー(モーセ五書)、ナビーイーム〔預言者〕とケトビーム(諸書)からなる。各区分の語頭をとりタナク(旧約聖書)と呼ばれる。しかしユダヤ人自身は『旧約聖書』と『新約聖書』に区別しているわけではない。便宜上ここではユダヤ教の聖書を『旧約聖書』と呼ぶことにする。トーラーはバビロン捕囚中に編纂され、エズラ、ネヘミヤの時代(前400年頃)に正典として公認されたようである。ナビーイームが正典と認められるのは前2世紀の初め頃と思われる。ケトビームの場合は、後1世紀の終わり90年頃に開かれたパレスチナのヤムニアにおけるラビたちの会議においてである。その後もこれらを正典とするかどうか3世紀まで議論されたが、結局ヤムニア会議の決定を覆すことはなかった。
- ¹³ 後6世紀から10世紀にわたって、マソラ学者がヘブライ語旧約聖書の欄外に脚注と母音記号を付加した校訂テキストで、その後はパレスチナのティベリアスを中心とする西方マソラ学派のものが中心となった。写本の一部については(図18)を参照。
- ¹⁴ 1946年以降死海の北西岸で偶然発見された「クムラン教団」が残した皮の巻物に書かれた文書群、「死海文書」と呼ばれることもある。近年公開された。テキストの本文研究をはじめとし、前2―後1世紀頃のユダヤ教とその諸派がおかれていた状況を知るうえで欠かせない資料である。修道会的ユダヤ教共同体で、ユダヤ教以外のグノーシス主義的二元論の影響が認められる。
- ¹⁵ ヘブライ語では'el。ほぼ全てのセム系の神概念を表す神名である。バビロニアではilu, アラビアでは'allāhとなる。神名エルは任意の神を表し、人間に対する神の優越性と超越性を示す。一方カナンのパンテオンでは最高神を表

図17 原シナイからラテンまでの各種アルファベット対照表

	原シナイ	フェニキア	コリント	アラム	古代ギリシア	南アラビア	ラテン	音価	名称	セム語/ギリシア語
1	א	𐤀	Ⲁ	Ⲁ	Α	Ⲁ	A	ɔ/a	aleph, alpha	
2	ב	𐤁	ⲁ	ⲁ	Β	ⲁ	B		bet, bêta	
3	ג	𐤂	Ⲃ	Ⲃ	Γ	Ⲃ	G		gaml, gamma	
4	ד	𐤃	ⲃ	ⲃ	Δ	ⲃ	D		delt, delta	
5		𐤄	Ⲅ	Ⲅ	Ε	Ⲅ	E	h	hé, epsilon	
6	ו	𐤅	ⲅ	ⲅ	Υ	ⲅ	V	w	wau, upsilon	
7		𐤆	Ⲇ	Ⲇ	Ζ	Ⲇ	Z		zai, dzéta	
8	ז	𐤇	ⲇ	ⲇ		ⲇ		h	hét	
9		𐤈	Ⲉ	Ⲉ	Θ	Ⲉ		t/th	tét, théta	
10	י	𐤉	ⲉ	ⲉ	Ι	ⲉ		y, i	yod, iota	
11	כ	𐤊	Ⲋ	Ⲋ	Κ	Ⲋ	K		kaf, kappa	
12	ל	𐤋	ⲋ	ⲋ	Λ	ⲋ	L		lamd, lambda	
13	מ	𐤌	Ⲍ	Ⲍ	Μ	Ⲍ	M		mém, mu	
14	נ	𐤍	ⲍ	ⲍ	Ν	ⲍ	N		nun, nu	
15	א	𐤎	Ⲏ	Ⲏ	Ο		O	'o	'ain, omicron	
16		𐤏	ⲏ	ⲏ	Φ	ⲏ		f/ph	pé, phi	
17		𐤐	Ⲑ	Ⲑ				ş	sadé	
18		𐤑	ⲑ	ⲑ		ⲑ		k	qof, koppa	
19	ש	𐤒	Ⲓ	Ⲓ	Π	Ⲓ	R		rosh, rô	
20		𐤓	ⲓ	ⲓ		ⲓ		ş	shin	
21	ת	𐤔	Ⲕ	Ⲕ	Τ	Ⲕ	T		tau, to	

図18 『旧約聖書』「イザヤ書」古写本

עֲלֵכֶם תָּבוֹעוּר תּוֹסוּפוּן
 סָרַח כָּל־רֵאשִׁי לְחַלּוּבֵי
 לִבְבוֹיֵי מִכָּף־רַגְלֵי עֵד
 רֵאשֵׁי אִזְמֹתַי כִּתְּמֵם פִּינֵעַ
 חֲבוּרָה וּבִלְכָה סוֹרֵחַ לֹא
 זָרוּרָה אֲחֻשׁוּרָה אֲרִיכָה
 בְּשִׁמּוֹ אֲרִעַנְכֶם שְׁלֵכָה

す (前 14 世紀のウガリット文書)。

『旧約聖書』にはエル・エリヨン「いと高き神」(創 14:22), エル・オーラム「永遠なる神」(創 21:33), エル・シャッドイ「全能なる神」(出 6:3) などの名称で出てくる。

- 16 捕囚期 (前 6 世紀) ユダヤ人はフェニキア・ヘブライ文字とアラム文字を使用した。アラム文字については注 39 参照。
- 17 Septuaginta 70 人訳聖書, 旧約聖書の比較的古いギリシャ語訳。前 3 世紀頃モーセ五書から手をつけ, 前 2 世紀には完成したと思われる。外典が含まれていることが大きな特徴である。
- 18 後 1 - 2 世紀パレスチナから東方シリアに持ち込まれ, 長期の改訂を施された(ペッシタ)。公認シリア語新旧訳聖書が完成するのは 5 世紀に入ってからである。
- 19 前 2 世紀頃ユダヤ教団から分離されたサマリア人の正典である。ヘブライ語の一方言で書かれていて, 『旧約聖書』の律法にあたる部分のみである。
- 20 バビロン捕囚以降ユダヤ教会堂では 1 節ないし 3 節毎にヘブライ語聖書朗読のあと, 口頭でアラム語に翻訳される習慣があり, 紀元前からアラム語で書写され始めた。
- 21 ラビ・ユダ・ハナシュ (後 229 年頃没) によって集成されたとされる最初期の口伝律法である。
- 22 ユダヤ人律法学者の口伝と解説を集めたものである。ミシュナとゲマラから構成される。ゲマラはミシュナの注解と解説を施し, さらにそれに付加された伝説などを集成したものである。パレスチナ・タルムッドとバビロニア・タルムッドの 2 種の校定本がある。一般的にタルムッドといえばバビロニア・タルムッドを指す。
- 23 イエスに関する福音書と使徒たちの書簡が信仰と生活の規範として受けられていく。後 3 世紀には『旧約聖書』と同様正典として承認される。その他の新約文書もカルタゴ会議 (後 397 年) やトリエント総会議 (1546 年) において現在の新約聖書全体を正典として決定した。
- 24 前 2000 年期のギリシャには独自の文字体系があったが, 前 1100 年頃にドーリア人が侵入し, 文化が破壊されると文字も失われた。ギリシャ人はフェニキア人からアルファベット文字を習得したと一般に認められている。このことはフェニキアの文字と初期ギリシャ文字を比較することで容易に確認できる。

ギリシャ文字 A(アルファ)はフェニキア文字を 90 度立てたものであるし,

180度転回させると絵文字の雄牛の角が現れる。ギリシャ文字とフェニキア文字の順序はほぼ同じであるが、フェニキア文字にない5個の文字を考案した。前5世紀の歴史家ヘロドトスも『歴史 V 58』のなかで、「……私の考えるところでは、これまでギリシャ人は文字を知らなかったのである。フェニキアの移住者たちは、はじめは他のすべてのフェニキア人の使うのと同じ文字を使用していたが、時代の進むとともにその言語を(ギリシャ語)に変え、同時に文字の形も変えたのである。当時このフェニキア人と境を接して住んでいたのは、大部分がイオニア人であったが、この文字をイオニア人から習い覚え、「フェニキア文字」と呼んでこれを使用したのである。フェニキア人がギリシャへ伝来したものであるから、この呼称は正しいといわねばなるまい。」(松平千秋訳 岩波文庫)ヘロドトスはアルファベット文字をポイニケーイア・グランマタ、つまりフェニキアの文字としている。ヘロドトスに先立つ古ギリシャ語碑文がクレタ島から出土したが、ポイニケーイア(phoinikeia)に派生する「書く」、「書記」という単語が使われている。Cf. L. H. Jeffery and Anna Morpurto-Davies, "PONIKASTAS and POINIKAZEN: BM 1969.4.2.1, a New Archaic Inscription from Crete," *Kadmos* 9 (1970): 118-54 アルファベット文字がギリシャに伝えられた時期とそのルートについては議論がある。初期のギリシャ文字は多様であり、字形や書字方向は一定していなかった。

²⁵ 聖書はラテン語訳によってヨーロッパ世界を支配した。しかし、キリスト教が国教になった当初からラテン語訳が普及したわけではない。通常「古ラテン語訳」と「ウルガータ訳」の2種に類別される。後2世紀-3世紀の古ラテン語訳は多種多様で、かつ地域差が大きかったため、一般的な聖書の翻訳が必要であった。これを完成したのはヒエロニムス(420年没)であり、ウルガータ(一般的)聖書と呼ばれる。ヒエロニムスが改訂し、翻訳したこのウルガータは完成から普及まで相当時間がかかった。この聖書が一般に普及するのは後8世紀-9世紀になってからのことである。

²⁶ 今日の偽典と外典と呼ばれる文書を含むことがある。

²⁷ キリスト教の一派で現在もエジプトに数百万人の信徒数をもつ。

²⁸ これについては、Louis-Jean Calvet, *Histoire de l'écriture* (Paris, 1996)。邦訳 矢島文夫 監修 ルイ=ジャン・カルヴェ著『文字の世界史』(東京, 河出書房新社, 1998年), 130-31頁参照。

²⁹ 矢島文夫『文字学のたのしみ』, 112頁。ただしエジプト文字(デモテック)からの借用とする見方もある。

- ³⁰ イランに起源する二元論的・グノーシス主義的宗教。ユダヤ人マーニー (Mani) によって創設されたキリスト教の一派で (後 3 世紀), 後 4 世紀には地中海地域一帯に広まった。4 世末にローマ帝国は禁教令を発した。のち中央アジアを経て, 中国までその勢力を伸ばした。8 世紀にはウイグル (トルコ系遊牧民) の国教となり, イスラームによって滅ばされるまで存在した。マニ教徒の文字は教祖マーニーによって考案されたと伝えられているが, アラム系シリア文字の草書体から創られたとすほうが妥当である。マニ教徒の文字は中央アジア, ソグデアナ地方のソグド人の文字を生むことになる。この文字からウイグル文字が創作された。しかし, イスラームの拡張とともにソグド文字もウイグル文字も消滅する。
- ³¹ キリスト教とほぼ同時期に地中海世界に起こった宗教運動を指す。すなわち後 1 世紀のローマ辺境に起こり, 2 - 3 世紀に最盛期を迎えるが, 4 世紀以降は衰退する。その理由はこの哲学的・思弁的宗教運動の主体が知識人であり, 民衆層に広がることがなかったためである。この思想の二元論および救済論は新約聖書に少なからず影響を与えた。
- ³² 荒井献著『原始キリスト教とグノーシス主義』(東京, 岩波書店, 1971 年), 157 頁以下; 『原始グノーシス』(東京, 講談社, 1984 年)。
- ³³ その名称からすると中世ラテン文字のゴチック体と同じだが, 全くべつのものである。
- ³⁴ ゲルマン系文字に属する。後 1 世紀 - 2 世紀に考案され, 中世まで使われていたようである。古アイルランド runar 「秘密」, アイルランド語 run 「秘密」, ウェールズ語 rhin 「秘密」などから, ルーン文字ははじめから秘術的要素をもっていたと考えられる。古代ローマの歴史家タキトゥスの『ゲルマーニア』(泉井久之助 改訳注, 岩波文庫, 1979 年)には木片に書き付けられた記号をト占いするという記述があり (『ゲルマーニア』, 10), この文字の目的を裏付けている。
- ³⁵ ルイ＝ジャン・カルヴェ, 前掲書, 133 頁。
- ³⁶ グルジアと呼ぶのはロシア語であり, 英語ではジョージアという。
- ³⁷ ルイ＝ジャン・カルヴェ, 前掲書, 149 頁。
- ³⁸ 矢島文夫『文字学のたのしみ』, 120 頁。
- ³⁹ 地中海から西方へはフェニキア文字が伝えられ, 新たな文字の考案に多大な貢献をした。他方, 東方への文字の伝播に関していえば, アラム・アルファベットが果たした役割が大きい。アラム人は当初シリア砂漠の遊牧民であったが, 前 12 世紀にシリアに入り, ダマスコやハマトなどに小王国を建てて

いった。前8世紀にはフェニキア文字から独自の文字書体を確立する。ペルシャ帝国の公用語となることで、東アフガニスタン、西アジアそしてエジプトにまたがる広い地域で使用された。この文字を出発点として、分かれた文字にヘブライ文字、ナバタイ文字、シリア文字、パルミラ文字、マンデ文字、マニ教徒の文字などがある。前330年ペルシャ帝国は滅びるが、その変種としてブラーフミ文字などインド系文字にもその痕跡を残している。

⁴⁰ 後328年と比定されたナマラー (Namarah) 碑文と最古のアラビア文字パピルスとの間には300年もの開きがある。Cf. J. A. Bellamy, "A New Reading of the Namārah inscription," *Journal of the American Oriental Society* 105, no. 1 (1985): 31-51;

"The Arabic Alphabet," ed. by W. M. Senner, *The Origins of Writing* (University of Nebraska Press, 1989). 101-2.

⁴¹ アラビア文字書体は大別するとクーフィック体とナスヒー体であるが、それぞれ分枝をもつ。とりわけナスヒー体からは時代と地域によって多種の書体が発達した。なかでも重要なのは13世紀頃イランで興ったターリーク書体(図19)で、15-16世紀になるとこの書体を用いた書道に発展する。書道は漢字文化圏に固有なものではなく、アラビア文字においても重視されてきた(図20)。

⁴² 牧野信也『イスラームの原点』(東京, 中央公論新社, 1996年)。

⁴³ 今日ではトルコ語訳などいくつか存在する。

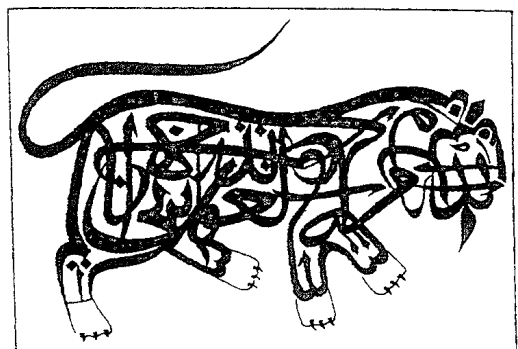
⁴⁴ 今日採取されている文字数が250個から400個にもなることから、アルファベットや音節文字でないことは確かである。アルファベットであれば40文字前後であろう。音節文字だとしても80-100文字の範囲である。

⁴⁵ 世界の文字研究会編『世界の文字の図典』(東京, 吉川弘文館, 1993年), 99

図19 ターリーク体



図20 聖句を書いた護符
(虎の絵になっている)



頁。

⁴⁶ 矢島文夫『文字学のたのしみ』, 126 頁。

* 図版については主として, 世界の文字研究会編『世界の文字の図典』, 東京, 吉川弘文館, 1993 年を使用させていただいた。